

学習指導案の書き方を考える

研究の中では、研究実践のための学習指導案作りをすることが多い。また、学習指導案は日常で最も行われることの多い最小単位の研究でもある。研究としての視点から、学習指導案を書くことの意味を考える。

■ 学習指導案の実態から

教育センターでは、初任者研修や6年目研修などの公開授業を伴う教科研修や、11年目研修や市町村県研究会などにおいて、多くの学習指導案（以下指導案と表記）に接する機会がある。

また、昨年度から始まった授業力向上セミナーでは、受講者全員に指導案の提出が課せられている。しかし、これらの指導案の中には、細読しても授業がイメージできないものが見られることがある。

「指導案を書く力と授業を実践する力は比例する」という声を聞くことも少なくないが、実際に良い指導案に基づいた授業は良い授業であることが多い。この場合の**良い指導案とは、ねらいが明確で一貫性のある指導案**であり、**良い授業とはねらいが明確で、それが達成できている授業**である。

一方で、指導案を準備することへの負担や、指導案の書き方がよくわからないなどの記述や意見もある。上述したように、指導案作成に対する所感は研究活動に対する所感と重なる。

指導案作成の実態から、指導案のあり方や必要性についてまとめた。

■ 指導案の必要性和意味

指導案は授業プランを书面化したものであるが、授業は通常指導案なしで行われている。ことさらに書面化しなくても、多くの教員はそれまでの経験や教材研究によって、授業プランをイメージしながら授業を行うことができるからである。このことも研究活動の実態と同様である。

しかし、いざ書面化しようとする、授業イメージを的確に指導案として形にすることは容易ではない。この場合、授業プランのイメージが抽象的で具体化されておらず、その時その時の流れにまかせた、いわば直感的な授業を行っていることが原因であることが多い。

よく言われることであるが、**指導案作りは教育活動の中で最小単位の研究活動**であり、**指導案に示された内容は授業のねらいを達成するための仮説**である。

「子どもの実態を踏まえると、このような指導法で、このような教材を使って、このような展開で授業を行えば、授業の目指すねらいが達成できるであろう」という仮説をもとに毎時間の授業を行っているのである。

指導案の作成についても、研究構想シートと同様、次のようなシートを使用すると、授業のねらいが明確になり、授業プランのイメージを具体的に持つことができる。

このシートは、各項目が相互に関連し、必然性のあるものとなるよう留意して記述する。

学習指導案構想シート(題材・単元または本時用)

1 題材・単元名		
3-① 子どもの実態	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">0 該当する学習指導要領の内容</div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">3-② 使用する教材・教具</div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">3-③ 指導方法</div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">4 評価方法</div>	2 目指す子どもの姿 (題材・単元の目標)

シートに記入する各項目の内容は次の通りである。なお、シートに記入した内容は、指導案作成の際、それぞれ表の右欄のように対応してまとめることができる。

シート項目	各項目への記述内容	指導案項目
0	この題材・単元に関わる学習指導要領の内容を記述する	(基盤)
1	題材・単元名または本時の題材名を記入する	題材・単元名
2	この題材・単元で達成したい子どもの姿を記述する 観点別に記述すると授業のねらいが明確になる	目標 (評価規準)
3-①	この題材・単元のねらいに関連する子どもの実態を記述する これまでの関連する学習履歴 この題材に関する関心・知識・技能 等	児童・ 生徒観
3-②	①の子どもの実態を、2の目指す子どもの姿にするために有効と 考えられる教材・教具やその工夫を記述する	教材観
3-③	①の子どもの実態を、2の目指す子どもの姿にするために有効と 考えられる指導形態や指導の工夫を記述する	指導観
4	右欄の目指す子どもの姿(目標)が達成できたかどうかを、何に よって、またどうやって評価するか記述する	評価

◇学習指導案構想シートの記入例

学習指導案構想シート：中学校家庭科本時案例

1 題材・単元名

1日分の野菜をいつべんに食べてみよう

3-① 生徒の実態

- ・ 調理経験が少ない
- ・ 自分の食べるべき量をイメージできない
- ・ 野菜摂取が不足している

0 該当する学習指導要領の内容

- A(1)ウ 中学生に必要な栄養を満たす1日分の献立を考えること
～食品群別摂取量のめやすの理解
- (2)イ 簡単な日常食の調理ができること
～魚・肉・野菜を中心とした基礎的な題材による調理

2 目指す子どもの姿

- ・ 1日に必要な野菜の量を理解する(知識・技能)
- ・ 野菜をおいしく食べられるように調理できる(技能)

3-② 使用する教材・教具

- ・ 緑黄色野菜4種類各100g、淡色野菜4種類各250g
- ・ 概量把握のためのワークシート
- ・ 振り返りのための記録用デジタルカメラ

3-③ 指導方法

- ・ 技能定着のため個人実習とする
- ・ 緑黄色野菜、淡色野菜の中学生1日分の量を1食で調理し量の把握をする
- ・ 性質の異なる野菜を準備し調理上の性質が観察できるようにする

4 評価方法

- ・ ワークシートの記述、定期試験、観察

この指導案構想シートをもとに作成した指導案を次に示す。

なお、指導案中の手書き文字は、上記シートに記述された内容と同じ内容の部分を示す。

本時学習指導案

1 題材 1日分の野菜をいっぺんに食べてみよう ← 1 題材・単元名

2 目標 ・1日に必要な野菜の量を理解する。(知識・理解)
・野菜をおいしく食べられるように調理する。(技能) ← 2 目指す子どもの姿

3 基盤 (生徒観、教材観、指導観)

3
① 生徒の実態

よりよい食生活を送るためには、自分の食事をコントロールする力が必要である。そのためには、まず自分に必要な量を把握しなければならない。しかし生徒は、調理経験の少なさもあって、自分が何をどれだけ食べたら良いのかを、数字だけ学んでも具体的にイメージすることができない。特に野菜については、慢性的な不足が問題となっている現代において、特に理解させる必要を感じている。調理については、炒める、ゆでるなどの簡単な調理はほぼ一人で行うことができる。

3
② 教材・教具

そこで今回は、1日に必要な野菜を1食分として調理することで、体験的に自分に必要な量を実感させたい。野菜は、1日に必要な量が概ね350gであり、そのうち100g程度を緑黄色野菜からとることが望ましいとされていることから、100gを緑黄色野菜、250gはその他の野菜を用いて一人ずつが計350gの野菜の調理を行う。個々が工夫して調理する活動を通して、野菜摂取への意欲も増すと期待される。多種類の野菜で350gを用意すると、全体量の把握や調理が煩雑になることから、緑黄色野菜とその他の野菜をそれぞれ1種類用いて、視覚的に量を把握しやすいようにした。使用する野菜は、家庭でよく調理されるものを選ぶ。

3
③ 指導方法

どの野菜を担当するかはくじ等で決めると活動への関心を増すと考える。また、根菜類と葉物類などでは、調理前後の変化の差が大きい。同じ調理台の生徒ごとに調理上の性質が異なる野菜を混在させて、相互に観察させて調理の経験値も増やしたい。調理台は4人で使用するが、個人調理のため、特にリーダー等を設定する必要はなく、生徒が活動しやすい生活班での配置とした。最後に調理実績をワークシートに記入させ、合わせて自己評価も行うことで、目標の達成ができたかどうかを確認させる。

4 評価規準と評価・支援の方法 ← 4 評価方法

○1日に必要な野菜の量を理解することができる。(知識・理解)

- ・ワークシートの記述から、調理を通して理解できたかどうかを判断する。
- ・ペーパーテストにより、1日に必要な野菜の量を問い理解を判断する。
- ・今回用いていない野菜についても必要な概量を答えることのできる生徒をAとする。
- ・理解できていない生徒には、写真や実物を再度提示して理解を進める。

○野菜をおいしく食べられるように調理することができる。(技能)

- ・実習時の観察により、食べられる状態に調理できているかどうかを判断する。
- ・特に高度な調理技術を用いている生徒や、複数の調理方法を用いている生徒をAとする。
- ・調理できない生徒には、調理法の容易な生食か炒め物、汁物にする方法を提案する。

